

1. 海外研修を通じて感じた日米の違いと今後の役割について

日本放射線技術学会による海外研修派遣の 7 期生として、スタンフォード大学での 1 週間の研修に参加した。私が今回この研修に参加した大きな目的は、最先端の研究から創世される新たな医療情報を知り、また医療情報が放射線部門とどのように関わっているのかを知ることであった。

広大なキャンパスの一角にある Lucas Center で行われた講義では、Dr. Mike Moseley をはじめとする講師陣の熱意に圧倒された。常に私達を楽しませ、興味を維持させながら、最新の研究内容を具体的に提示する講義は、たとえ専門外の内容であっても決して退屈しないものであった。講義以外にも病院の放射線部門、画像処理を専門に行う 3D ラボ等の見学があり、日米における業務の違いを知る良い機会となった。

医療情報に関して言えば、放射線部門にも 10 名以上の IT 担当者がいるものの、医療従事者と直接的な関わりは少ないようで、あまり認知されていない印象であった。医療従事者が医療情報システムの運用・管理にも携わっていることが日本独特のことであることを知ることができた。

日米では医療保険制度が大きくことなり、米国では非常に高価な医療サービスが提供されている。米国でも今後、国民皆保険制度が導入されることになっており、仮に現状よりも安価に医療サービスが提供される場合には患者数の増加が予想される。医療サービスについて効率性、安全性を両立している日本の医療制度は海外の模範となる可能性がある。上記より、放射線部門の教育研修や業務をサポートする医療情報システムの海外展開を期待できる研修となった。今後、医療と情報処理技術の橋渡しができる「医療情報の専門家」として、プログラマなどの IT 技術者とは異なる役割を世界にアピールできるように研鑽を積んでいきたい。また、日米の医療情報システムの違いについて研究して、効率性や安全性に対する情報システムの貢献について調べてみたいと考えている。最後に、このような素晴らしい研修を企画していただいた日本放射線技術学会、スタンフォード大学、GEHC-J の関係各位、今回の研修を引率していただいた金沢大学の田中先生に心より御礼を申し上げる。



写真：Lucas Center にある庭で開催されたワインパーティの様子。（右から 2 番目が筆者。）

2. 学会の国際化と今後の学術大会のあり方について

日本放射線技術学会では先端研究のみならず、日常の運用業務の発展を目的とする研究や教育活動を多く行っている。日本の診療放射線技師を優秀にした理由のひとつは、これらの研究と業務を両立した活動にあると考えられる。研究面では、国際学会での英語による学会発表、英文誌への論文投稿を通じて国際的にアピールすることが、日本が国際的な競争力を勝ち取るために当然必要となる。さらに海外における研究動向を知るためには論文を読むことはもちろんであるが、今回のような国際交流を継続することは非常に効果的であろう。今後はさらに専門分科会単位での学術交流を可能にすれば、より深い知見が得られると考えられる。一方、業務面においては、国際的にも成熟した日本の技術や教育研修制度を海外に広めていくような国際貢献を果たすことが、今後の日本に求められる役割となり、学会活動もこのような方向性で検討するべきと考える。

学会の国際化と学術大会の関係について、例えば、秋季学術大会については公用語として英語を採用した国際学会として開催する方法が挙げられる。アジア地域を中心として演題募集を行い、小規模ながらも質の高い研究のみを採択する方法が考えられる。また、特定の分野の将来像について深く議論できるような国際ワークショップを開催し、質疑応答に十分な時間的余裕をもたせるような企画も考えられる。これにより参加者の間での共同研究の創出などが期待できるのではないかと。一方、総会学術大会は教育的要素を考慮して、秋季との役割分担を明確にするのが良いと思われる。ただし、基本的な知識に関する教育は最小限として、各分野の最新の研究トピックに関する Up-to-Date を重点的に講演することが学術大会としての目指すべき姿と考える。